

4. 入学者選抜委員会

阿部 直（委員長・東海大学内科学系呼吸器内科学）

医学部の入学者選抜制度は、良医としての適性を備えた学生の選抜に十分な配慮が足りず、学力重視に偏る傾向がある。入学者選抜委員会では、各大学による理想的な選抜方法の採用を目的として、国内外の選抜方法を調査・検討している。

第15期日本医学教育学会：2007年には「入学者選抜における態度・資質の評価」というテーマで入学者選抜に関する討議会を開催し、医学部AO入試の現状と問題点、面接の意義、米国医学部の入学試験制度と面接の位置づけ、等に関する講演と討議を行った。2008年には前年と同じテーマで適性試験、絵画や詩文を題材とした小論文、個人面接とグループ面接などについて講演と討議を行った。

第16期日本医学教育学会：2009年には、指定校推薦入試、学士編入学制度、地域枠入試、プロフェッショナルリズムの立場から見た米国医学部の

選抜制度、に関しての講演を中心に入学者選抜討議会を開催し、全国32大学からの参加者が活発に討議した。また、入学者選抜委員会委員長が日本医事新報社から医学部入試のあり方について取材を受け、4427号に掲載された。2010年には、7月に開催される第42回医学教育学会大会のパネルディスカッション『入学者選抜方法を考える—良医の適性を持った人物の選抜—』を以って入学者選抜に関する討議会に代える予定である。パネリストには、学力以外の様々な評価方法を入学者選抜に取り入れると共に、追跡調査を実施している国内4大学の入学者選抜の責任者に加えて、米国医学部受験制度に詳しい米国人医師の計5名を招いている。フロアーからの活発な質疑応答・討議と共に、参加者自らが自大学の入学者選抜方法の改善に寄与することを期待している。

5. 倫理・プロフェッショナルリズム委員会

後藤 英司（委員長・横浜市立大学医学部医学教育学教室）

日本医学教育学会には、長年にわたり倫理教育委員会が設置されていたが、19年の委員会の見直しに伴い、行動医学教育委員会との統合が提言された。これに伴い、倫理・行動科学委員会が設けられたが、平成21年度に再び見直しがあり、現在の倫理・プロフェッショナルリズム委員会が発足した。このように委員会の構成が変化している背景には、全国的に一般（教養）教育課程が縮小傾向にあることや医学専門課程における倫理、安全、心理、患者—医師関係等の教育の位置づけが不明確であるという問題がある。

21年度は、本委員会のメンバーとして生命倫

理とプロフェッショナルリズムに関するオピニオン・リーダーを集め、11月に「白浜記念臨床倫理ワークショップ」を聖路加看護大学で2日にわたり開催した。参加者は23名（医学、看護、薬学など）で、プログラムには臨床倫理とプロフェッショナルリズム教育に関する内容がほどよくブレンドされ、参加者から高い評価を得た。また、委員会では、毎回この領域の教育に関する情報や意見の交換がなされ、活発な討議が展開されている。

生命倫理とプロフェッショナルリズム教育の内容には重複する部分も多いが、視点等には大きな違

いも見られる。今後、実際の学部教育カリキュラムの中で両者をどのように位置づけて行くか、十

分に検討する必要がある。

6. 準備教育・行動科学教育委員会

中村 千賀子（委員長・東京医科歯科大学）

1. 今年度の目標

現行の「準備教育モデル・コア・カリキュラム」を、時代状況、医療環境、臨床現場の実情と変化の動向に即して吟味し、新たな準備教育モデルに必要な、情報収集、分析、検討、素案づくりを行う。

「準備教育モデル・コア・カリキュラム」において内容が十分に活用されていない「人の行動と心理」を見直し、教育現場に即した代替案を作成すべく、重点的に検討する。

2. 準備教育の位置づけ

教養科目との橋渡し、卒前専門教育に関わる基礎知識やスキル修得としてのみの準備教育ではなく、卒後の、専門職・社会人として歩み続ける上での準備教育と位置づける。とりわけ人文・社会科学領域では、多様で変化し続ける社会状況や医療環境を常に把握し、対応し学び続ける「生涯学

習社会」を想定、これを生き抜くに必要な見方や方法、関連学問領域の参照・活用方法などを学ぶことを準備教育と考える。

3. 準備教育モデル・コア・カリキュラム全体について

「情報の科学」については、科学的見方や方法論（人文・社会科学のそれを含む）、その基盤となるフィロソフィー、調査法、発表スキルなどを含む上位カテゴリー「キャリア開発の基礎スキル」を新たに立て、統合すべく検討する。

「人の行動と心理」を、個人の心理、行動、対人関係を軸とする項目と捉え、これとは別に、社会関係、生活環境、制度、政策、経済、文化などの文脈から人間、社会、医療についての総合的な理解を育む「社会と医療」という項目を検討する。「くらしの現場」を中心に据え、その前提となる制度や経済などの社会環境とそこで社会関係を生きる個人の双方に注目できるモデルを模索する。

7. FD 委員会

高橋 弘明（委員長・岩手県立中央病院医療研修部）

FD (Faculty Development) は、学習指導者の教育能力開発を意味する言葉として使われていることが多い。日本医学教育学会 FD 委員会は、卒前・卒後教育に関わる FD 充実を活動目標としている。全国の FD の現状を把握するとともに、

年一回の医学教育者のためのワークショップ（富士研 WS）の企画・運営を行う。富士研 WS は全国の医師養成機関等で、指導的立場にある人材を対象に、FD を企画・運営する能力の修得を目的とするほか、医学教育の発展と開発を行うための